

A photograph of a forest path made of large, moss-covered stones. The path leads into a dense forest with tall trees and green foliage. The lighting is soft, suggesting a shaded forest environment.

第26回 全国読書作文コンクール 優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

平成二十八年第二十六回全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

心で聴けば

大沼 まこ (小四)

望んで障害者になった人など誰一人としていないだろう。もちろん新井先生だって……。全盲になった新井先生がいかにもがき苦しみ、自分の弱さと闘いながら、今の場所にたどり着いたことか。私は、この本だけでなくテレビでも新井先生の授業する姿を見て、生の声を聞いて、ものすごいエネルギーを感じた。特に、宮沢賢治の「オツベルと象」の朗読場面ではその迫力に圧倒された。学校中に響き渡る大きな声は、先生のエネルギーそのものに感じられた。その姿を見て、ここまで来るのは、どんなに大変だったのだろうと思えた。その長く険しい道のりが自分にとって必要な時間だったと言い切る新井先生が、私にはとても輝いて見えた。

人は何かを失って初めて、当たり前前に思っていたことが、実はとても幸せなことだったと気付く。私の母も新井先生と同じく、中学の国語の先生をしている。新井先生のようにある時期まではごく普通に、充実した毎日を送っていた。ある日突然、右耳が聞こえなくなったのだ。私が

何度母を呼んでも全く反応がない。最初は気のせいかと思ったが、度重なるようになり、一緒に住んでいる祖母がその異常に気付いた。「突発性難聴」と診断され、入院することになった。原因はよく分からないが、何らかのストレスではないかと言われた。私は少し思い当たることがあった。ちょうどその頃、母は「教務主任」という責任のある立場になり、帰宅時間が毎日のように遅くなっていった。母の口から「疲れた」とか「つらい」などという言葉は一度も聞いたことがなかった。母は私達の前では普段通りにふるまっていたが、おそらく、いろいろ大変なことを抱えていたのだろう。あの時の母を思いやれなかった自分を私は反省した。

入院治療で治らなければ、回復の見込みはないと言われ、私達家族は祈るしかなかった。私は不安でたまらなかった。もう片方の耳まで聞こえなくなったらどうしよう。もう二度と私の声が届かなくなったら……。そんなことばかり考えて、私は毎日、不安と恐怖で心が押しつぶされそうだった。結局、母の聴力は回復しなかったのだ。

母は、それを受け入れるしかなかった。新井先生のように、自分の考え方を変えるしかなかった。幸い、一方の耳は機能しているのだから。見た目では、耳が不自由だと他人には気付かれない。だから、変に気を遣われることもない。自分が工夫すればいいだけのこと。それでいいのだと母は言う。

新井先生は、目が見えなくなって見えてきたものがあると言っていた。母も耳が不自由になったことで生徒の表情をよく見るようになったと言

う。祖母がいい事を教えてくれた。

「聴く」という漢字は十四の心をもって、耳を傾けると書く。人の話しを心で聴くということが大切なのだ。

対象図書名 光を失って心が見えた

大賞へ、審査員のひとこと

読書作文コンクールは読書感想文コンクールと違って、対象図書の内容に沿って書くというものではありませんね。本を読んで触発されたことからいろいろ書くというものです。本で読んだことを自分の問題として引き受けて書いてくれるのがとてもよいと思います。

本から受け取ったこと、テレビで見たことなど自分に引きつけて書かれていて、文章ものびのびしていてもすばらしい作品です。

受賞者のひとこと

先生から受賞の電話をいただいたのは、夜遅くだったので、私はもう眠りについていました。翌朝、母から聞いて、驚きとうれしきでいっぱいになりました。

今回私が読んだ本は、私の心を大きく動かしました。光を失った新井先生と私の母の置かれた状況が重なったからです。私の心の中に広がった、不安や恐怖、もやもやした気持ちを、何とか表現したいと思いました

た。先生にご指導いただき、母や祖母に細かいことを聞き取り、書き上げました。私だけでなく、母や祖母の思いもまった作文です。

入塾三年目の私は、これまで先輩たちの活躍を見てきて、いつかは先輩たちのようになりたいと思いつながら取り組んできました。「大賞」というのは、まさにあこがれの気持ちで見上げていた賞でした。これからも、本をたくさん読み、言葉や表現を学び、自分の世界を広げていきたいと思っています。

いつも力いっぱいのご指導を下さる先生と、たくさんさんの刺激を与えてくれるセミナーの仲間たちに心から感謝しています。ありがとうございます。

小学生低学年の部・最優秀賞(小三)

ぼくの宿題ができなかった理由

平澤 良樹

「なんで宿題なんかあるんだろう。こんな物せすにはやくあそびたいなー。」とぼくも思うことがあります。だけどやらないと先生におこられ

るからやりませす。

えりこ先生のクラスの生とは宿題をせずに宿題ができなかった理由を先生に話しました。みんなおもしろい理由ばかりでした。

ぼくが宿題ができなかった理由を言うとしたら：

「先生、きのうのばんごはんの後、宿題しようと思ったたら急に体がちんでアリくらいになっちゃたんです。びっくりしていたらアリが来ました。かくしておいたおかしにアリがたかっていたのです。おかしといっしょにアリにはこぼれて近くの公園までつれて行かれました。アリのすの前でギリギリだっ出できました。でもふかい草むらだったのでどっちへ行けばいいか分からなくて帰ることができませんでした。そこにトラックぐらいの大きさのバツタがやってきました。こわかったけど家で家に帰れると思ってしがみつきました。そうしてふりおとされないようにまっつたら、ぼくの友だちの長岡くんがバツタをつかまえました。

やったーと思っました。長岡くんがぼくの家のところを通ったのでそこでバツタからおりました。ドアのすきまを入れてやっつと家に帰りました。

家の人はぼくの心配もせずにテレビを見ていました。ぼくはふとんに入っつてねました。目がさめたらもどおりになっていました。それから急いで学校にきたので宿題ができませんでした。」と言っます。

だけどやっぱりエンマ様に舌をぬかれるから、うそついちやいけないな。それに宿題は自分のためにする物。だからきちんとしてやるよ。

受賞者のひとり

ぼくがさいゆうしゅうしゅうしゅうをとったと知った時は「やったー」と大声で言っました。

教科書の本をしようかいするところで見つて、ぼくは前から「先生、しゆくだいわすれました」を讀んでみたかったので楽しく讀みました。本を讀んでいくうちに、ぼくだったらこう言おうかな、というアイデアがどんどんうかんできました。だからそれを、先生に教えてもらいながら一生けん命書きました。

ぼくは作文がにが手だけど、これからもたくさんの本を讀んでたくさん感じたことを書いていきたいな、と思っました。

小学生の部・最優秀賞(小四)

宿題10分うそ2時間!

山本 佳音

対象図書名

先生、しゆくだいわすれました

私が初めてこの本を手にとった時、表紙の絵がうらにながっていることに気づいて広げてみました。そうしたら、先生の背中に白いトカゲがいて気づきました。他にも教室には、宇宙人がいたり顔のある

大きなえん筆をかかえている生徒がいたりして、いったいどんな話なのか、とわくわくしました。

ある日、ゆうすけが宿題をやるのをわすれてきます。うそを言ってみますが、すぐにばれてしまいます。その時、先生が「うそをつくならもっと上手につかなくちゃ」と言い、それから毎日だれかが宿題をわすれてきて、その理由を考えてくることになります。

私は一学期、学校で宿題の点けん係でした。もし私だったら、りなのように順番に宿題をわすれてこようという意見が言えるでしょうか。たぶん言えないと思います。なぜなら、宿題をわすれてくるのはいけないことだと思うからです。こんなてい案ができたりなは、とても勇気があるなと思いました。

私がこの本を読んで一番心に残ったのは、最後に先生が話したうその部分です。

最初は、先生は何を話し出すのかなと思ったけれど、宿題を作るのをわすれた理由につながることに気づいて、おもしろいなと思いました。また、先生が宿題を作るのをわすれてきたということにもおどろきました。

先生はなぜ、上手にうそがつけいたら宿題をやらなくてもいいというてい案をしたのでしょうか。私は、「宿題をわすれてくるのは楽そうに見えるて、実は大変なことなんだよ」ということ、またそれを通して、宿題をやることの大切さをみんなに伝えたかったのではないかと思います。

もし私だったらどんなうそをつくか、考えてみました。

昨日、私が学校から帰ってきて宿題をやらなきゃと思った時、ドアをノックする音がしたんです。

ドアを開けると、なんとそこには魔法使いのおばあさん。にっこりわらってつえをくるつと回したかと思うと、そこはぶどう会の会場の前。私は服がドレスに変わっていることに気づきました。足を見ると、すてきなくつもはいています。きれいだな、と思って見ていると、なんと足が勝手におどり始めたんです。最初はダンスをおどれてよかったと思っただけれど、足はぶどう会が終わっても止まりません。夜中によく止まったかと思うと、私はそのままつかれてしまいました。

宿題は10分でできるのに、このうその話を考えるのに2時間ぐらいかかりました。宿題をわすれるのは大変なんだなと思いました。

私のしょう来のゆめは、学校の先生です。私もえりこ先生みたいに、おもしろいことをてい案して、大切なことを生徒に気づかせられる先生になりたいなと思います。

対象図書名 先生、しゅくだいわすれました

受賞者のひとこと

このような、すばらしい賞をいただけ、とても光栄です。

じゅくで先生に「最優勝賞に選ばれましたよ。」と言われた時は授業の

声が耳に入ってこないほど、うれしかったです。

わたしは、本が大好きです。なぜなら、本を読んでいると、その本の物語の中に入っていけるようでとても楽しいからです。

今までも本をたくさん読んでいたけど、こんなに深く本を読んだのは初めてです。深く本を読んでもみると、今まで味わったことのない、おもしろさを味わえた気がします。

これからも、おもしろさを味わいながら、本を読んでいきたいです。

小学生の部・最優秀賞(小五)

「今」は未来の種

木村 菜花

なぜ勉強をしなくてはいけないのだろう。算数なんて、しょう来の何の役に立つのだろうか。私はいつもこんな思いをいだきながら勉強している。両親に聞いてみてもしょう来の夢につながるからと説明してくれるが、ぎ間は消えない。そんな時に母が「海辺の宝もの」という本を読んでもみたらとすすめてくれた。この本を読んでみて、なんで勉強をするのか、こんなぎ間に少し答えが見つかった気がする。

メアリー・アニングは、学校は好きじゃないし、友達もいない。けど小さいころから変わり石、つまり化石集めが大好きな女の子だった。父親がなくなつてからは、たくさん人の力をかりながら、変わり石を売るお店を出し、家計を支えた。まだ、身分差別や女性への差別がはげしかった時代に、大好きな化石をさがし続け、すばらしい発見をし、人生を化石にささげた、力強い女性だ。

私もメアリーのように大好きな事をするだけです。したらどんなにいいだろうと思うことがある。メアリーは大好きな変わり石集めを一生続けていてうらやましく思っていた。でもメアリーは大好きな事ばかりして、ずっと楽しかったわけではないと思う。変わり石集めをしていると、石つ子メアリーと近所の子にからかわれる。大変な変わり石集めをただの石ころを拾ってきただけ、と簡単に思われたり。たくさんつらい事や困なんに立ち向かってきたからこそ、大好きなものに夢中になる時間が出来るのではないか。そして、その困なんに立ち向かう時間は決してムダではなかったと思う。私は本に関わる仕事をしたい。だから本さえ読んでいけばいいと思った。でもそれはちがう。関係のなさそうな算数や理科などでもその知識が役立つ時があるかもしれない。そう考えると苦手の教科でもがんばれる。いろいろな知識をつけることは決してムダではない。なぜ勉強するのか、メアリーは私に教えてくれたと思う。メアリーが教えてくれた事。何でもちようせんすることの大切さ、好きな事を続けていくことがきっと未来につながっているという事。知識

はそのまま未来に生かされていくものだ。どこかできつと光をはなつ。自分の好きな事は夢をつくり出す種となり、育んでいく肥料となる。今、学んでいる事は私の未来をつくっていく。今はぜったいに未来につながっていると感じかされた。遊びだってそうだ。友達との付き合いだって。未来に生かされていく。夢をつくる「今」という種を大切に育てていきたい。芽を出して大きく成長するまで、好きな事を楽しんで続けたい。いっしゅん、いっしゅん大切に生きたい。きつと「今」は大きくなっていくから。

対象図書名 海辺の宝もの

受賞者のひょうご

じゅくの先生から初めて結果を聞いた時、うれしいというよりもごくおどろいて、なかなか信じられませんでした。そして、時間がたつにつれ、実感がようやくわいてきて、すごくうれしかったです。夏休みにたくさん時間を使って、いろいろ工夫するのは大変でむずかしかったです。でも、こんなにすごい賞をいただけで、がんばったかいがあったなと思いました。「最優勝賞」というとても大きな、すばらしい賞をもらえるなんて夢にも思っていなかったのです。とても感激です。これから大好きな本をたくさん読んで、いろいろな新しい知識や考えを学んで将来への財産にしていきます。今回、この賞をいただいて、自信につな

がりました。色々な事に全力でがんばっていきます。ありがとうございました。

小学生の部・最優秀賞(小六)

自分の気持ち次第で

松本 華 怜

生きていく上で、心の持ち方がいかに大切なのかを、新井先生が教えてくれた。目が見えなくなって諦めることばかりで、死にたいとまで思った新井先生が、ここまで立ち直れたのは、もちろん多くの人の支えがあったからだろうけれど、先生自身の気持ちたちが前向きに変わった、それが一番大きいと思う。

新井先生が光を失い、絶望した時のその苦しみは、他人にはなかなか分からないのかもしれない。だからと言って、誰のせいにも出来ない。自分がどう考え、どう生きていくかという問題だから。

私の場合、生まれつき「斜視」という目の病気を持っている。視力そのものは正常だが、一方の目はちゃんと見えていても、もう片方は勝手に

違う方を向いている状態になる。時々物が二重に見える程度で、日常生活にはそれ程障害はない。新井先生の大変さに比べたら私の「斜視」なんて、大したことはない。今なら、そう思えるし、きっぱりそう言える。

以前の私はそんなに強くはなかった。クラスの男子にからかわれたことがあったからだ。休み時間に男子達が面白がって変顔対決をしていた時、急に私の話題になった。「おまえって、よく目を両側に寄せるよな。

一人で変顔やってんの？」と、一人の男の子が言ったら、「そうそう、変顔やってるよ。」と、他の男子も騒ぎ出し、クラス中に笑いが起きたのだ。

みんな私のことをそう見ていたんだ……。私はその時、泣くのをこらえるのに必死で、言い返すだけのエネルギーなどなかった。完全に馬鹿にされたと思った。とてもみじめな気持ちだった。顔のことをイジられて平気な女の子なんていないはず。その日一日私は、顔を見られまいと、うつむいてばかりいた。みんなと視線を合わせないようにした。だれとも口をきかなかった。突然一人ぼっちになってしまった。家に帰ってからも気分は落ち込んだままだった。

今思えば、男子にからかわれたぐらいで、暗やみの中に閉じ込められ、イジイジしていた私。体のどこも悪くないし、視力だって正常だ。やる気があれば何にでも挑戦できる。新井先生が味わった絶望感に比べたら、私のこの出来事は笑い話で済むことだ。新井先生が奥様に支えられて希望を取り戻したように、あの時、私も親友の言葉に励まされ、自分を取

り戻すことができた。「華怜は華怜だよ。今のままでいいじゃない。」

確かにその通りだと思った。どんなに嘆いても、私が斜視であることは変え様がない。だからといって今まで、不自由だった訳でもない。きつとこれからだってそうだろう。だったら、自分の気持ちの持ち方次第ということになる。

自分の気持ちが変われば、人生が大きく変わる！新井先生に心から「ありがとう」を言いたい。

対象図書名 光を失って心が見えた

受賞者のひごと

三年生で入塾し、作文コンクールに毎年参加してきた私は、これまでずっと特選をいただいてきました。「賞にこだわらずに、全力を尽くす」というのが先生の方針ですが、いつかは先輩たちのように大きな賞が取れたら、と思ってきました。みんなが一生けん命取り組むのが当たり前なら、私も自然に、考える姿勢が身につけてきたように思えます。

今回、自分の目のことを作文に書くのは少し勇気が要りました。みんなにどう思われるのだろうか、不安でした。作文を読んだ先生が、「全然気づかないし、むしろ、チャームキングだよ」と言ってくれたので、ほっとしました。過去の出来事を思い切って書いたことで、自分でも気持ち

すつきりしました。

「最優秀賞」という、すばらしい賞をいただくことができ、とてもうれしく思います。これからも、文章をたくさん書いて、もっともっと表現する力をつけていきたいと思っています。

中学生の部・大賞

「本当に大切なもの」

小松原 唯 (中二)

視界ゼロになるという事を想像する事が出来るだろうか。私はいつも見ている景色や人の表情、行動が全て見えなくなり、暗闇の世界になってしまふ事を思うと恐ろしく感じてしまふ。しかもそれが急に訪れると考えると、頭の中が真っ白になり何も考えられなくなる。

新井先生は、中学校教師として幸せな日々を送っていたが、網膜剥離になり両目の視力を失った。私がいも新井先生と同じように目が見えなくなってしまうたら、何もかも諦めて前向きになれず、失明した自分を受けとめる事は出来ないだろう。だが新井先生は目が見えない現実から

逃げず、真っ正面から自身と向き合っていたのだ。先生は本当に強い人だと思う。

先生は、同じ状況にいる弱視の先生からの「新井さんも教師に戻るよ。」という言葉をきっかけに、前向きな気持ちに変わり、教師へ復帰するという道に進んでいった。誰かの言葉で気持ちが良い方向に変わった経験は私にもある。私は、中学に入学してから悩みをよく抱えるようになった。私が一番頭を悩ませ大変だった事は、クラスの授業中の様子だ。入学して少したった頃は、ほとんどの人が授業を聞こうとしていなかった。私は授業を一生懸命聞こうと毎日精一杯だった。だが朝になると「また授業の内容が頭に入ってこなくなるのか。」と暗い気持ちになった。ある朝、私が授業について母に愚痴をこぼしていた時、母が私に言った。「マイナス思考でいたら悪い事が寄ってくるよ。プラス思考でいたら良い事が寄ってくる。」と。私は気持ちを变えても意味なんてないと思ったし、学校生活をプラス思考で送ろうとしたこともなかった。でも、意味は無いと決めつけるのではなく、まずは実践してみようと決心した。するとなんとその効果は抜群だった。プラスに考えるとこんなにも授業が楽しくなるのかと思った。今は中学二年になり、授業も落ち着き学校が毎日楽しい。でもたまに、マイナス思考になる自分があるので、悪い方に考える自分を追い出すためにも私は登校する時、「楽しんでくるよ。」と言って家を出ている。

新井先生は失明してから自分に対する周りの人たちの態度が変わった

事に気づいた。先生が失明する前と同じように話しかけてくれる人もいたが、話しかけてこなくなった人も現れた。その人達にも色々理由があると思う。目が見えなくなった先生とどんな話を話せばよいのかと迷い、悩んでしまうのではないだろうか。

私も実際に似たような経験がある。小学校の時、同級生の女子がいつからか学校にあまり来なくなった。彼女は家庭での事情で学校を休まざるをえなくなっていった。中学生になってからは度々見かけるようになっていった。私は声をかけてみようと思い、挨拶から始めてみた。彼女は小さな声で返事をしてくれたが、すぐに他の友達の所へ行ってしまった。私はその時「やっぱり小学校の時の事が頭に残ってるからあまり話しかけてほしくないんだろうな。」と思った。それから声かけもしなくなっていた。それが彼女のためだと思ったからだ。私は母にその事を何気なく話してみた。すると母は次のように語ってくれた。「その子は声をかけられなくなつて良かったと思つてないと思うよ。逆に悲しくなつたと思う。挨拶をしてくれないから、声かけをやめたらそこで終わってしまう。言い続ける事が大切。自分の事を少しでも気にしてくれてると思うと嬉しくなつて、その子からも話しかけてくれるようになると思う。」自分から話しかけないと相手は話しかけてこないという事に気づかされた。自分から声をかけ、笑顔で接する事こそ、彼女の間に出来た距離を縮めていく方法だと思った。だから、私はその日から声かけをまた始めた。声がかけれない時は手をふるだけでもいい。それだけでも、彼女は嬉しくなつ

てくれると信じた。今では、彼女は笑顔で私に手を振り返してくれている。私はそれがとても嬉しい。相手がどう思うかは、もちろん考えなくてはいけない事だ。しかし、考えているばかりではいけない。まずは少しの勇気を出して行動する事が大切だと思う。

私は気づいた。気持ちの持ち方が大事だという事。そして、人に対して何か悩む事があれば、まず、行動に移す事が大切なのだ。私の周りには私が想像もできないような事情の中で生きている人達が沢山いるのだろう。人はみんな違う。それぞれが長所や短所をもち、色々な心をもっている。新井先生は光を失ったが、そのおかげで出会ってきた人の心を見る事ができた。自分にとって大事なものは手に触れる事ができ、目に見えている周りのものだけだと思つている人もいるかもしれない。だがそれは違う。本当に大切なものは触れる事も見る事もできない心の中にあるものだという事を私たちは知るべきなのだ。

対象図書名

光を失つて心が見えた

大賞へ、審査員のひとこと

本を読んで自分のひつかかるものを素朴に感じて突き詰めてみると、正確で的確に自分でも考えていないことが、ふっと出てくる瞬間があるんじゃないかな、そういうことが楽しいんじゃないかな。自分の興味のあることをどこまで引つ張れるかな。そういうものがいいものだという

ことがこの作品を読んでよくわかりました。

書いていて、もぐりこんではつぶされ、また向かっていく。そして最後は腰砕けになってしまいうけれども、その腰砕けを見せてくれることがとてもかわいいしすばらしいです。

岡部 愛子

受賞者のひょうご

私は「光を失って心が見えた」の本を読み、読書作文を書きました。この本は、全盲という障害を乗り越え、教師へ復帰する新井先生の話が記されたものです。私は新井先生の思いや、経験に自分の経験を重ねて、原稿用紙に自身の考えを書いていきました。書き終わった作文を読み直すと、今私が伝えたい事がしっかり書けたと思います。そして、その作文を今回のように評価していただけた事を大変嬉しく思っています。本には著者の気持ち主人公の気持ちが多様な言葉で記されています。その気持ちから自分の考えを自由に想像する事ができる。それが本の良い所だと私は思います。これからも本との出会いを大切に、たくさんの本を読んでいこうと思います。読書作文コンクール受賞は私にとって意味あるものとなりました。本当にありがたい賞だと思います。

中学生の部・最優秀賞(中一)

私は私だから

言葉の分からない国で大切なのは「笑顔」。確かにそうだ。今回、「川床でえくぼが三つ」を読んでいる内に、私はイギリスで過ごした幼少期のさまざまな思い出が甦ってきた。

母の提案で、私達家族がイギリスに移り住むことになったのは、私が五歳の時だった。今思えば、自分にこの先何が待ち受けているのか、全く想像もつかないまま日本をあとにしたようなものだった。五歳では大した分別もない年齢だ。それが結果的にはラッキーだったといえる。小学生になって、途中からとなると、友達との別れや勉強のこと、何と言っても言葉で不自由することは最大の悩みになっていたはずだ。でも、まだ五歳の私には、見知らぬ国に行くのも、旅行気分と大して変わらなかったのだ。

ただ性格的には、私は母とは正反対で、引っ込み思案で内向的だった。母にしてみたら、私のこの性格を変えるいい機会と捉えていたのかもしれない。粗治療と言ってもいい。母は、何と私を現地の小学校に入れたのだ。何事にも挑戦することをモットーにしている母は日本人学校に通

わせるのでは、イギリスにきた意味がないと考えたようだった。そうとは知らない私は、気楽な気持ちで現地の小学校に行った。

いよいよ、新入生として迎えられる日。教室のドアを開けた瞬間、生徒全員が一斉に私に注目した。そこで、私は愕然とした。日本人は一人もない。ようやく私は外国にきたことを悟ったのだった。なるようになれ！という気持ちだった。

転校生が注目されるのは、どこでも同じなのかもしれない。休み時間になると、私はみんなに取り囲まれ、話しかけられた。誰もが日本人の私に興味を持っているようだった。みんなが一斉に質問してくる。やはり、何を言っているのか分からない。言葉の壁が、そのまま人間関係の壁になってはいけなさと、とっさに思った私は、とにかく自分の分かる英語を言った記憶がある。「笑顔」を添えて。その途端、みんなの表情もガラッと変わった。みんなも笑顔になったのだ。この時私は思った。ここでは、日本人の私が外国人なんだと。そして、言葉はよく分からなくとも、笑顔がお互いの距離を縮めてくれるということ。

この本で楓子さんが教えてくれたことを、私は小学一年生でイギリスで体験していたのだった。文音達のように夏休み期間だけの海外旅行とちがって、そこで暮らすとなると、やはり何かと問題も起きるものだ。

イギリスでの私の学校生活は、軌道に乗ってきたものの、ある日とてもショックな出来事があった。男子数人が一人の女の子をからかったり、バカにしたりしていた。先生が見ていない時にやるので、とても卑怯で

悪質なものだった。見兼ねた私は、「いい加減にやめなさいよ！」と言った。すると、からかいの矛先は私に向けられた。思いもかけない言葉が飛んできた。「日本人のくせに、だまってる！」——彼らは確かにそう言った。それは、明らかに差別のニュアンスを持っていた。顔を見れば分かる。いかにも憎々しい表情だった。私はここでは「日本人のくせに」と言われるのか。さげすまれているのだと、はっきり悟った。ショックのあまり、返す言葉が出なかった。

それがきっかけで、子どもの私なりに真剣に考えた。私が日本人であることは変えようがない。どう頑張ったって、私がイギリス人になれる訳がない。はい、確かに私は日本人です。それが何か？私は開き直った。そして、自分自身が成長できるように、全てに頑張ろうという気持ちになった。この時、私は母親譲りの血を実感したのだった。

それ以来、私は勉強も英語も音楽も、何もかも頑張るようになった。他人にどう思われようが、私は私だ。そう前向きに考えることで、学校生活も良い方へ変わっていった。そうして、私にとって最も思い出に残る最良の日が訪れた。その一年間で最も頑張った人に贈られる名誉な賞に、この私が選ばれたのだ。全校生徒の前で、校長先生から私の名前が呼ばれた時は、一瞬何が起きたのか分からなかった。歓声があがり、私は友達や先生から祝福された。「おめでとう！」の嵐に包まれた。私はその時、日本人としての誇りを持ってステージに立っていたのだった。

帰国した今でも、あの時の感激を思い出す。確かに、海外で暮らすの

は、楽しいことばかりではない。言葉も食べ物も、習慣も文化も違うのだから、考え方が違って当然だ。トラブルがない方がおかしい。でも、今まで知らなかったことが分かるようになる。それだけでも「ありがたい」と思える。

文音がインドネシアが大好きになったように、私もイギリスが大好き！と心から思える。私を成長させてくれた国だから。

対象図書名 川床にえくぼが三つ

受賞者のひとこと

今回、私は迷わず「川床にえくぼが三つ」を選んだ。自分のイギリスでの経験が思い浮かんだからだ。実際読んでいくと、主人公の心情に共感できるところがたくさんあり、自分自身についても深く考えるいい機会になった。

中学生になってからの私は、部活や習い事のためセミナーに行けないことが多くなった。この作文を仕上げる夏期講習期間も何日か欠席したので、正直、焦りを感じていた。作文をきちんと書きたい自分と、それがなかなか叶わない現実の自分との闘いだった。そんな私を支えて下さったのは先生だった。先生のアドバイスのおかげで絞り込んでまとめることができた。

「愛子、最優秀賞おめでとう！」——電話の先生の声が弾んでいた。去

年に引き続き二度目の最優秀賞。予想もしていなかっただけに、家族みんなが驚いた。そして、喜び合った。大きな賞を二度も受賞できて、とても光栄に思う。ご指導下さった先生、協力してくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいだ。

中学生の部・最優秀賞(中二)

偏見を無くす

長 塩 拓 磨

仙台四郎は福の神になったのか？障害者は周りの人を幸せにするのか？その問いに恐しい形で答えを出した事件が起きた。相模原の障害者施設で十九名を刺殺した犯人は、障害者を蔑視し殺害する事で社会から排除しようとした。根本には障害者は周りを不幸にするという独善的な考えがあったのだろう。

四郎が生きていた時代は、もっととあからさまな偏見があった。表面には出さない現代にもずっと続いている。障害者への偏見を無くす事はできないのだろうか。四郎のように「福の神」として崇められる存在にな

る事が偏見がない社会なのだろうか。

私の家の近くに十数人の障害者が暮らす施設がある。通学途中にある作業所へバスで通っているようだ。小学生の頃は周りの子供達が、バスを指差し笑いながら蔑んだ悪口を言っていた。しかし車内の障害者の人達は、自分に笑いかけてくれているのを喜ぶように、ニコニコしていた。四郎と同じだ。子供達は、そのニコニコすら「キモイ」などと悪口に交えて投げ返した。自分の家族がニコニコしていれば嬉しいと思うだろうが、偏見が入ると気持ち悪いになる。私はただ眺めていた。友達がしている行為より、障害者がバカにされていることが、ただかわいそうだった。

小学校には、「青空つばさ」という特別学級があった。知的、身体、学習などの障害のある子供が少人数で通っている学級だ。行事などは普通クラスへ入って行動を共にするので、遠足で一緒になった。やはり私はかわいそうだと思う気持ちで、弁当と一緒に食べようとグループへ誘った。友達は口々に文句を言ったが先生が抑えた。先生は私をとてほめてくれた。障害者にやさしくしたり面倒をみるとほめてもらえる。私の内にはかわいそうだという同情の念しかない。これも一種の偏見ではないのか。先生にほめてもらえるのが誇らしく、私は、何度も親切にした。自分より劣っているかわいそうな人という偏見があっても先生はほめた。今、思うと違和感がある。障害者に偏見を持たないで下さい、共に社会で活躍しましょうなどは、キレイゴトだ。障害は個性だと言う人もいる

が、実際ほとんどの人は偏見の目で見ている。

四郎を福の神にした仙台の人達も偏見の目で見るからこそ福の神と呼ぶようになったのではないかと思う。四郎は神になりたかったのではない。普通に人として接してほしかったのだと思う。

商売が上手くいった人達は、四郎を蔑むことはなかった。同じ人間として、足らずを足してやり温かく見守った。そういう経営者は客をより好みしたり、欲を張ったりしないので、商売が上手くいったのだと思う。

本当に人間同士の心を開いた交流を持つのは難しい。ナオは、何の偏見もなく、四郎を友達として思いやった。きっとこのナオのような接し方を障害者の人達は望んでいるのではないだろうか。世の中の常識が通用しない四郎は、とことん純粋だ。障害者の人達によく見られることだ。興味のあることだけに熱中し、気の向かないことにはそっぽを向く。心の赴くままに行動する。そして心の内をこれでもかとさらけ出す。喜怒哀楽が豊かだ。どこまでも自由人だ。空気を読まなくていいのだ。こう考えると障害者の方が、世の中を楽しく生きていけるような気さえしてくる。

しかしその自由を奪っているのが偏見だ。生きづらくしているのは周りの偏見なのだと思う。

偏見は無くなったか。四郎の時代から現代まで、ずいぶん時間が流れたが、偏見は無くならない。確かに色々な制度のおかげで、生活面ではかなり豊かに人間らしい生活ができるようになったと思う。支援する

団体やフォローする自治体や政策もできた。かつては差別的に排除されてきたが、今は社会参加も可能だ。しかし、心の中には分け隔てている壁がある。偏見による壁だ。

人は誰一人同じ人間はいない。みんな一人ひとり違うのだ。そして誰もが足りない所を持っている。その量の違いで障害者を壁の向こうへ追いやるのはやめよう。

四郎は鏡のようだ。接した人間の心をそのまま映して返す。かわいそうだと同情で接した私には、障害者は同じように心の貧しいかわいそうな人だと思ったのではないだろうか。

人との違いを認め、相手を理解する気持ちを持って接すれば、健常者、障害者の区別はない。自分の心の奥底にある異質を差別し、偏見を持つ気持ちを今一度見つめ直す機会にしたい。障害者を神になどしない、当たり前前に周囲にいる仲間となる社会、つまり障害者の偏見を無くすために、ネットを活用し私の考えを発信していきたいと思う。そして偏見のある社会を少しでも偏見の無い社会へと変えていきたい。

対象図書名 福の神になった少年

受賞者のこと

小学三年生から塾の課題としてやってきた感想文ですが、とても苦手だったので、毎回苦勞していました。全国審査へ進むこともあまりな

ったので、今回賞をいただいて、今までこつこつやってきたことがむくわれたようで、とてもうれしかったです。

もう一つうれしい理由があります。それは文中にも書きましたが、私のすぐ近くに障害者の施設があり、偏見について考えることはあっても行動に移すことはできないでいました。この受賞で私の考えが文字となって多くの方の目に触れ、偏見の壁を壊すきっかけになるのではないかと思います。

塾の先生方のご指導にも改めて感謝したいです。この本で受賞できたことが本当にうれしいです。ありがとうございました。

中学生の部・最優秀賞(中三)

もう逃げない!

高橋 奏

卓球に限らず、スポーツならどの競技でも「強さ」を求められる。勝つか負けるか。勝たなければ意味がない。弱い者は、どんな言い訳をしてもみつともないだけだ。スポーツをやっている人なら誰でも分かって

いることだ。でも、日向のように強ければ、何をやっても許されるとい
うのは、間違っていると思う。

私がバスケットボール部に入部したのは、友達に誘われたから。「ま、
いいか」という軽い気持ちだった。そもそも、体力もなく、運動神経が
良くもない私が、運動部に入ったこと自体が間違いだった。人数の少な
い卓球部とちがって、私の学校のバスケット部は人気があるから人数も多い。

入部段階で、同じ一年生でも、すでに実力の差は歴然としていた。日向
のように、ジュニアチームで活躍していた子もいた。基礎トレーニング
だけでふうふう音をあげているのは私だけだった。自分の体力の無さを
思い知らされる毎日だった。本格的な練習が始まると、吐き気や腹痛に
悩まされた。あまりのきつさに、私はトイレに駆け込み、人知れず泣い
たこともある。体調不良が続き、何日か休んだ。たった数日でも、休ん
でしまうと差がついていく。最初は、初心者同志仲良くやっていたが、
その集団の中でも、ついに私が最下位になってしまった。他の初心者達
が、みるみる上達していく中で下手なままでいたのは私だけだった。み
んな口には出さないが、いつの間にか「ランク付け」が出来上がってい
く。私は誰の目から見てもビリだった。みんなが私を見下しているのが
はっきり分かった。

日向も自分より弱い人を見下していた。自分が強いからといって、思
い上がった態度をとる奴は、どこにでもいるのだと思った。いわゆる「オ
レさま」タイプだ。卓球部では、日向と先輩の対立だったが、私の部で

は、私一人に対し一年生全員が敵だった。一人対集団の図式だ。中でも
日向そっくりのタイプの女子の態度は最悪だった。彼女も小学校時代バ
スケチームに所属し、活躍してきたというだけあって、動きの良さは一
目瞭然だった。先輩達も彼女には一目置く程だった。日向と違う点は、
先輩に対しては従順な態度をとっていたことだ。その分、彼女の強気は、
弱い者に向けられた。常に私が標的となった。

練習中、私の動きが少しでも気に入らないうと、「足引っぱらないでよ！
ちゃんとやってよ！」と口癖のように言う。その度に私は、（ちゃんとや
ってるよ！私だって一生けん命やってるんだ！）と、心の中で言い返す。
ある時、「あんたは邪魔っ！」と、彼女に思いきり突きとばされて、私は
ケガをした。私をかばう者など一人もいなかった。何事もなかったよう
に練習が続けられたのだ。私は足を引きずるようにして帰宅した。こん
な私の姿を見て母は、「もう辞めたら？」と言った。

確かに、「辞める」という選択肢はあった。身も心も疲れ切って帰って
来る娘の姿を見たら、親だったらそう思うのが自然だろう。何もバスケ
部だけが部活ではないのだ。他に、もっと自分らしくいられる場所があ
るのではないか。私もそう考えた。何よりもこの苦痛から解放されたい。
それが一番だ。それが最も簡単な解決法だということは、自分が一番よ
く分かっていた。つまり、「逃げる」ことだ。それは、今までの私の人生
そのものだった。いやなことからすぐ逃げる。だから、今までの習い事
も何一つ長続きしなかった。何一つ得ることが出来なかった。そうして

生きてきたのが、この私なのだ。一体どこまで続くのだろう。いつまで逃げればいいのだろう。今まで何とも思わずにきた「逃げる」ということ。むしろ、自分の特技だと開き直ってきたのだ。

私はバスケット部に入って、初めて自分に向き合ってみた。日向タイプの彼女に見下され、罵倒され、ケガまでさせられた私。傲慢な彼女に怒りがこみ上げてくる。あんな人間は大嫌いだ。でも、それ以上に嫌いなのは、逃げようとするこの「私」だ。

人はそれぞれ持っている能力が違う。勉強でもスポーツでもそうだ。いつも表舞台で脚光を浴びる人もいれば、頑張ってもなかなか芽の出ない人もいる。だからと言って、そこで諦めたらそれまでだ。大切なのは、いかに努力し続けるかということだと思う。

私のいたバスケット部は部員十六人。それに対してユニホームは十五枚。ユニフォームをもらえない人は、マネージャーになるという決まりだ。当然、私ということだ。きつい練習から解放されても、今度は、「マネージャーなんだから」と、何かとこき使われる。でも私は平気だ。もう逃げない。選手達を支える側に徹した。裏方仕事を最後までやり切った。裏方としてのプライドを持って。

受賞者のひとり

先生から電話があったのは、ちょうど私が習い事から帰って来た時だった。急いで母が電話に出た。最初は、私の進路についての話のようだった。でも、それは、前おきだった。その内、母の慌てふためく様子が見てとれた。何となく聞き耳を立てていた私だが、へとへとに疲れて帰ってきたので半分眠りかけていたところに、受話器を渡された。「最優秀賞、二連覇おめでとう！」先生のその言葉に、疲れも眠気も一気に吹き飛んだのだった。

今回、私はバスケットのことを作文に書いたが、その続きを言うと、引退したあとも、私はあの悔しさをバネに、バスケットを個人的に習っている。その習い事から帰った直後にあったのが、先生からの受賞を知らせる電話だったのだ。中三の私にとっては、最後のコンクールでもあったので、この受賞は本当に嬉しい。

入塾した頃、作文どころか読書も苦手だった私だが、すばらしい先輩達やセミナーの刺激的な環境の中で、大きく成長できたと思う。ここまで成長できたのは先生のおかげです。今まで指導して下さいました先生に感謝の気持ちでいっぱいです。

表紙写真 熊野古道

第26回(平成28年度)全国読書作文コンクール
優 秀 作 品 集

平成28年10月 発行

発 行 公益社団法人 全国学習塾協会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2

TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294

E-mail info@jja.or.jp

